
23分間

ゆいまる

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

23分間

【Nコード】

N2294H

【作者名】

ゆいまる

【あらすじ】

私の恋は毎朝の23分間。彼は多分知らないだろうけど……。

彼を始めて見たのは、高校一年の、お弁当を忘れたある春の日だった。

寝坊して慌てて家を飛びだした私は、いつもと違う電車のいつもと違う車両に駆け込んだ。

一駅が過ぎる頃、鞆が妙に軽い事に首を捻り、次いで弁当を忘れた事に気がついた。
やってしまった。

舌打ちする勢いで盛大に肩を落とす。

電車はそんな事お構いなしに進んでいく。外の景色はいつもの速度で後方に飛んで行き、吊り広告はどれも同じ角度で揺れていた。
途中のコンビニで何か買えばいいや、と思いなおして顔を上げる。

そんな私の視線の先に、彼が、いた。

彼は市内の有名な進学校の制服を着ていた。

涼しげな顔をして、何かの本を読んでいた。込み合っている車両の中、彼が立つ場所だけが、まるで熱気から解放されたように静かで清らかに見えた。

その日、結局、お弁当を忘れたことを、お昼になるまで私は忘れてしまっていた。でも、たぶんお弁当があっても食べる事は出来なかっただろう。

あの時から、私の心の中は彼でいっぱいになってしまったのだから。

それから、毎日乗る電車は彼のいるあの時間のあの車両の電車になり、私が電車に乗って降りるまでの23分間が特別な意味を持つようになった。

電車が揺れる度に、私の胸の中もことごと揺れた。
彼はいつも俯き加減に下を向き、本を読んでいた。

誰かの声を聞く度に、まだ聞かぬ彼の声を想像した。

授業で教科書をめくる度に、進学校の教室でペンを走らせる彼を想像した。

校庭を眺める度に、音楽を聴く度に、本屋を訪れる度に、いつも私の心の中には彼が浮かんできては、一体どんな人だろうと思いを巡らせさせた。

晴れの日に柔らかな日差しに揺れる、前髪。

雨の日に綺麗に畳まれた、黒い傘。

雪の日に濡れてしまった、革靴。

どんな日も、どんな季節も彼をそつと人垣の向こうから見ていた。
声をかけようかと何度も思った。

でも、じゃあ、なんて声をかける？　って考えた時、どうすればいいか全くわからなくなる。

どんな言葉もわざとらしい気がしたし、どんなタイミングも良くはないように思えた。

そんな風に手をこまねいているうちに、私の心は声をかけるころではなくたってきてしまった。

時が経てば経つほどに、自分の臆病な心は、彼のほんの僅かな気配にも敏感になり、一年を過ぎる頃には、勇気を振り絞らなければ視界に入れることすらできないようになっていた。

もしかしたら、もう彼女がいるかもしれない。そう思えば胸は重く塞いで、息もできないほど苦しくなった。

それでなくても自分なんか全然タイプじゃないかもしれない。そう思うと、哀しくて鼻がつんと痛くなつて喉が締め付けられた。

どうせ自分なんて、と拗ねてみたりもする。

そのくせ恋愛の歌に彼を重ね、雑誌の恋愛講座を真剣に目を通し

もした。

彼が読んでいる本のタイトルがわかる時は、同じ本を読んで同じ時を過ごしているような気分になった。

やることごとんでちぐはぐで、支離滅裂。でも、彼が自分の中に溢れてくるのは自分でも、もう、どうしようもなかった。

朝日を受けて、彼を乗せた電車が滑り込んでくる。

緩やかに速度が落ち、今日もいるかと毎朝不安になりながら、彼の座る姿を探す。そして人ごみの中にその背中を見つけると胸を撫でおろし、流行る鼓動を抑えるようにいつもの場所に立つ。

必死に探していたくせに、いざ彼の姿を確認すると、心は落ち着きをなくして、泣きだしたくなったり、逃げたしたくなったりする。口の中からこの鼓動が飛び出しそうで、じっと唇を噛みしめる日もあった。

目が合わないか期待して顔を上げて、彼が本から視線を上げると慌てて俯いた。

外の景色も、他の人の顔も、何にも目に映らない。

私の朝の23分間。

こんな朝を私はずっと繰り返していた。

しかし、今日。

ふと目を覚まし天井を見つめた時だった。

涙が一筋零れ落ちた。

それはまるで、今まで何もなかったところからふわっと湧き出た泉のようだった。

まだ明けきらぬ静かな早朝の空気が漂う、薄暗い自分の部屋。じわじわと冷たい空気が足先から昇ってくるのを感じ、私は自分の胸の中にぽっかりと突然出来た大きな穴に気がつき、戸惑った。涙を拭い、身を起こす。

まだ目覚ましのならない時計が、刻々と時を刻んでいる。

「ああ」

思わずもれた自分の声が、ため息なのか何なのかわからない。

でも、そんな私の戸惑いなんか構いもせずに、胸に空いた穴を広げようと、容赦のない現実がそこかしこに息を潜める朝の闇から突き刺さって来た。

冷酷に、無慈悲に、そして凄まじい勢いで。

そう、どれだけ自分の中が彼で溢れていようと、自分は彼の声も名前も何にも知らないのだ。

私がどれほど想いを募らせた所で、彼と私は全くの他人。

駅から駅へ。私が電車にのる、一日に24時間ある中の23分間、ただ同じ車両にいるだけ。

それだけの存在。たった、それっぽちの存在なのだ。

私は何も知らないし、彼は私の存在すらきつと知らない。

当たり前のその事実が、今更になって揺るぎないほどの厳格な輪郭と質量をもつて、自分に迫ってきた。

なにがそうさせたのかわからない。起きてすぐにかき消えてしまった夢のせい、か、目覚めてすぐに聞えて来た窓の外の雀の声のせい。か。それとも、昨日彼が読んでいた森鷗外のせいなのか。

原因は何にしる、事実は私がこうやって認識するよりもずっと前に目の前に横たわっており、単に今、私がそれを受け入れたにすぎない。

私の気持ちは、彼にとって何も意味しないのだ。

だから、今日は電車を一本遅らせた。

こんな苦しい思いをするくらいなら、もう、自分の世界からいなくなってしまう方がいいと思った。

―― たった23分間

それだけを目をつむって過ごしてしまえば、彼は私の世界から消えてしまう。

たった、それだけで、たった……。

案の定、車両内に彼の姿はなかった。あるはずなかった。

心はいつもより落ち着き、沈んだ。

馬鹿馬鹿しいとも思った。勝手に彼に恋をして、勝手に諦めて、勝手に落ち込んで。まるで、まるで広い舞台に独りで右往左往するピエロのようだ。

滑稽で情けなさ過ぎて、涙も出なかった。

彼のいない23分は、静かで寂しかった。

駅を降りた。

これから、私の朝はこんなものになるんだ。

ただ、駅から駅へ。A地点からB地点へ、運ばれるだけの物体。

ホームに足を降ろした瞬間、崩れ落ちそうになり、頬が細かく痙攣した。

自分が泣きだそうとしているのだとわかった

ダメだ。友達たちも先生だってこの駅を降りるのだ。こんな所で泣くわけには……。

私は必死で取り繕おうと、ハンカチを取り出してそれを口にあてた。

「あの、大丈夫ですか？」

声が聞こえたのはその時だった。

電車酔いでもしたのだと駅員に間違えられたのか。

慌てて振り返る。

そして、私は目を瞠った。

彼が、そこに立っていた。

彼は気まずそうな顔をして、あの前髪をかきあげると

「あ、その……。君は知らないと思うんだけど、俺、いつも君と同じ電車に乗ってて。その、今日は乗ってなくて、どうしたのかと。

その、ストーカーとかのつもりはないんだけど、だから、あの……。気になって君がいつも降りる駅でちょっと待ってみようかと思って

本当は姿を見たらそのまま電車に乗っていくつもりだったんだけど、君が具合悪そうにしてるから、その、つい」

しどろもどろに、理由の様なそうでないような事を口にした。

こんな声をしてたんだ。

こんな話し方をするんだ。

私を知っていてくれたんだ。

私達を好奇の目で見ながら過ぎていく他の生徒達の事も、不思議そうな顔をして横をすり抜けるサラリーマンも、忙しない登校の空気も、朝の明るい光も、発車する電車のドアがしまる音も、何もかもくすぐったかった。

けど、なにより、なにより私は嬉しくて……。

また、涙が零れた。

明日からの23分間が、もっと特別になる。そんな予感がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2294h/>

23分間

2010年10月8日14時45分発行